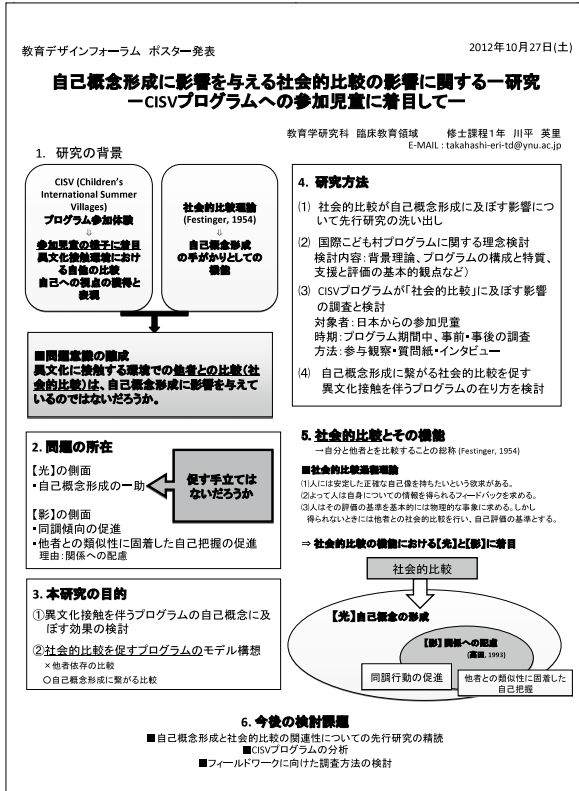


自己概念形成に及ぼす社会的比較の影響に関する一研究  
 —国際理解プログラムへの参加児童に着目して—

臨床教育領域 川平 英里

当日のポスター



ポスター発表の内容

1 研究の背景

発表者は、CISV (Children's International Summer Villages の略) という、世界 10-12 国から子どもたちが集まり 1 ヶ月間の共同生活を行うプログラムに携わっている。そこで日本からの参加児童が自身と他国の子どもを比較し、自身の感情や考えを徐々に周囲に発信していくようになった点に着目した。Festinger (1954) は「自分と他者とを比較することの総称」を社会的比較と呼び、「社会的比較過程理論」を提唱した。この「社会的比較」は自己概念形成の手がかりの一つであることが明らかにされている。そこで、同プログラムの異文化接触環境での他者との比較が、自己概念形成に及ぼす影響を与えるかについて関心を抱くようになった。

2 問題の所在

社会的比較は自己概念形成の手がかりとして

の【光】の側面を持つ一方、同調行動の生起、他者との類似性への固着及び依存を促進する【影】の側面も持っていると考えられる (高田, 1993)。社会的比較の【影】の側面ではなく、自己概念形成をもたらす【光】の側面の機能を促す手立てはないだろうか。

3 本研究の目的

異文化接触を伴うプログラムの効果の検討を通して、他者との類似性に依存した比較ではなく、自己概念形成に繋がる「社会的比較」を促すプログラムの在り方を提案する。

4 研究の方法

① 関連概念の先行研究の洗い出し、② CISV プログラムに関する理念検討、③ 実地調査、④ 自己概念形成に繋がる社会的比較を促すプログラムの在り方モデルの構想

当日の成果

自身の研究を実際に言葉にして人に伝え、他領域の方からの意見や質問を頂く中で、本研究が必要とする新たな視点が見出せた。また、今後更に研究が必要とされる部分も明確にすることが出来た。

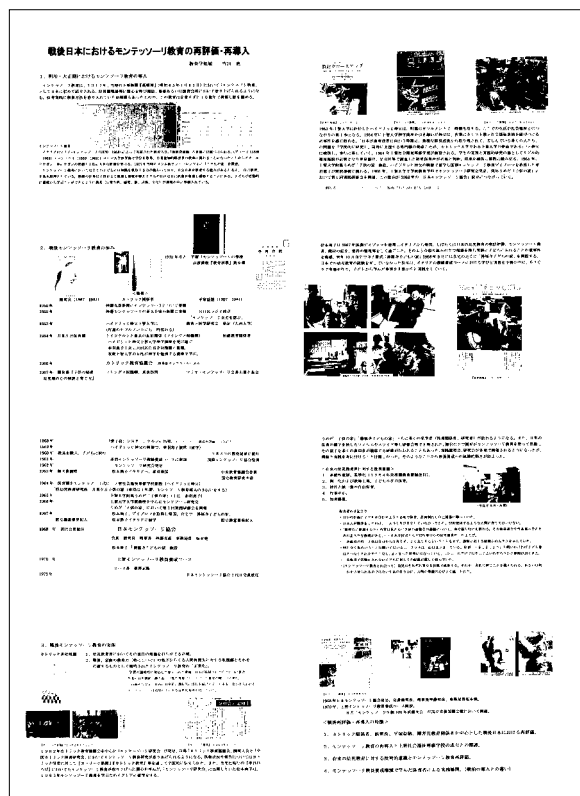
<参考文献>

高田利武 1993 日常事態における社会的比較の様態  
 奈良大学 紀要 第 22 号 pp.201-210  
 Festinger, L. 1954 A theory of social comparison process. Human Relations, 7, 117-140.

はじめに

本発表では、戦後日本におけるモンテッソーリ教育の再評価・再導入の展開過程について、当時の写真や資料の紹介を交えながら行った。

1 当日のポスター



2 ポスター発表の内容

モンテッソーリ教育とは、イタリアのマリア・モンテッソーリ（1870 - 1952）によって考案された教育方法のことである。1912年に日本で初めて紹介され、教育現場で関心を呼んだが、この教育方法は定着せず10数年で衰退し、戦後に再評価・再導入されるまで影を潜める。戦後の再導入は鼓常良、平塚益徳をはじめ、国内のカトリック関係者、障害児教育の関係者を中心に行なわれた。実践現場の見学、及び実習が可能になり、実施園が増えたことが戦後導入の特徴である。

現在の私の研究課題は、戦後日本におけるモンテッソーリ教育の再評価・再導入の展開の諸相と、それを

推進した原動力の所在を実践の立場から明らかにすることである。本発表に際しては、1950～1960年代の幼児教育界の動向と問題点を整理し、当時の保育者が抱えていた在来の幼児教育に対する批判的意識について若干の分析を試みた上で、カトリック関係者による戦後の導入の実態について報告を行った。その結果、原動力の一端を実践現場に見出すことができた。今後は保育者の問題意識をさらに詳細に検討するために、彼らの手記やアンケート等の分析をより精緻に行ない、課題の究明に取り組んでゆきたい。

3 当日の成果

当日は、20分間、ポスターの内容に沿って口頭発表を行い、その後およそ20分間質疑応答の時間をとった。その間、現職教員や他領域の学生の質問を受け、感想や意見を聞かせていただくことができた。要点をまとめると、次のようになる。

- ① 幼児教育という狭い枠組みの中だけで戦後日本におけるモンテッソーリ教育の再評価・再導入の検討を行うのではなく、1950～60年代の教育全体の状況や問題点から捉えることが重要である。
- ② モンテッソーリ教具を子どもに提示する際に、保育者が無自覚的に影響を与えることが起こり得ることを考えると、モンテッソーリ教育は完全に自由な教育とは言えないのではないか。

以上の2点により、今後の研究にとって貴重な示唆が与えられた。早速検討を始め、研究に反映させる所存である。また、ポスターを作成する準備の過程で、どのように構成すれば参加者に対して自分の伝えたい内容が伝わるのかを考え、何度も構図を組み直した。この過程で本研究の課題意識をより明確化させることができた。以上が本発表を通して得られた成果である。

青年期前期における敬老志向性とその構造に関する研究

心理学領域 高橋 知也

**【目的】** 本研究の目的は、「青年期における敬老志向性尺度」(高橋, 2012)、および「老人イメージ尺度」をはじめとする諸尺度によって得られた結果から、青年期前期における敬老志向性とその構造を明らかにすることである。

**【方法】** A市内の中学校に在籍する生徒 190名(男性 88名、女性 102名)を分析の対象とした。調査には質問紙を用いた。構成は、「青年期における敬老志向性尺度」(高橋, 2012)、「老人イメージ尺度」(鄭ら, 2000)、「思いやり測定尺度」(安達, 1996)、個人志向性・社会志向性P尺度(伊藤, 1993)、児童用社会的望ましさ尺度(桜井, 1984:一部抜粋)とフェイスシートである。調査に際してはプライバシーへの配慮等の説明を紙面、および口頭で行った。

**【結果】** (1) 各尺度における性差の検定

調査で用いた各尺度について、t検定による性差の検討を行ったところ、敬老志向性と個人志向性について5%水準、思いやりについて0.1%水準で、それぞれ女性に有意に高い得点となった。さらに、青年期における敬老志向性尺度の下位尺度についても同様に検討を行ったところ、敬老態度のみ、1%水準で女性に有意に高い得点となった。

(2) 各尺度との尺度間相関

各尺度間の相関係数を算出したところ、思いやり測定尺度と個人志向性尺度について、他の全ての尺度との間に正の相関が見られた。

(3) 青年期前期における敬老志向性の構造

従属変数に青年期における敬老志向性、独立変数に老人イメージ、思いやり、個人志向性、社会志向性、潜在変数として建前としての高齢者観を仮定したモデルを作成してパス解析を行った結果、敬老志向性に対しては思いやり、および建前としての高齢者観からそれぞれ正のパスが引かれた (AGFI=.960,CFI=.987, RMSEA=.040) (図 1)。

**【考察】** 男性に比べ、女性がより強い敬老志向を持つことが示唆された。しかし、「敬老態度」で男性より

女性で有意に高い得点となった一方で、「敬老行動」について男女に有意な差が見られなかった。以上の結果は、豊島ら(2011)の大学生を対象とした研究、および「孝行をしようとする態度と、実際の行動の生起の間にはかなりの隔りがある」(Chen, 2007)を支持する結果であると言える。更にパス解析の結果から、青年期の敬老志向性を強く規定する要因として、思いやりと建前としての高齢者観の二点があると推察される。

**【結論】** 他者への思いやりが敬老志向性を強く規定すること、思いやりは個人志向性に強く規定されることが明らかとなった。これらの結果から、子どもの敬老志向性を育む上では個人志向性の育成、言い換えれば「生きる力」を育むことが肝要であると推察される。

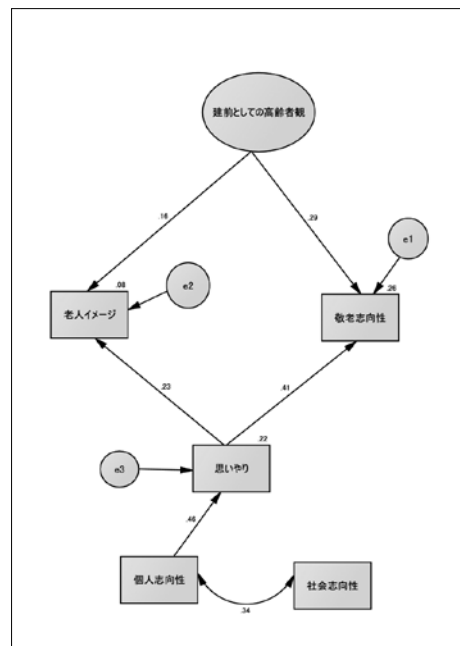


図 1 敬老志向性を従属変数とするパスダイアグラム

### 【問題と目的】

近年、学校現場ではキャリア教育が推進されている。その根拠として、教育基本法の改正や学習指導要領の改訂でキャリア教育の内容が組み込まれたことなどがあげられる。小学校においてもキャリア教育が進められ、夢の重要性が問われている。そこで、小学校においてキャリア教育を受け、キャリア意識が浸透してきている児童期後期を対象として、将来の夢の有無やその要因となる事柄、また、将来の夢をもつことでの効果を把握して、それらの関連を検討することを目的とする。

### 【1次調査】

1. 目的 現代の小学生がどの程度夢を持っているのかを把握し、夢に対してどう考えているかを測定する尺度を作成することを目的とする。
2. 方法 調査対象者は、関東甲信越地方の公立小学校の4～6年生500名（4年生164名、5年生169名、6年生167）。内容は、①フェイスシート、②夢の有無、③夢の内容と理由である。
3. 結果と考察 夢を持っていると回答した者は439名、夢を持っていないと回答した者は61名であった。これより、88%程度の対象者が、夢を持っていることが明らかになった。夢の種類においては、スポーツ選手や医療、芸能関係などがあげられた。夢を持った理由は、大きく4つのカテゴリーに分類された。憧れや尊敬している「憧憬要因」、社会に貢献したい「貢献要因」、今、していることを続けたい「継続要因」、これからやってみよう「興味要因」となった。

### 【2次調査】

1. 目的 夢の有無、夢の態度・考え方と、夢を持つ要因やキャリア意識、学習意欲、生活満足感との関連を検討することを目的とする。
2. 方法 調査対象者は、関東甲信越地方の公立小学校の4～6年生689名（4年生226名、5年生224名、6年生239名）。質問紙内容は、①フェイスシート、②夢を持つ要因を測定する尺度（夢要因尺度）、③キャリア意識尺度（新見・前田，2009；一部抜粋）、

④夢に対する態度や考え方を測定する尺度（夢志向尺度）、⑤学芸大式学習意欲検査（簡易版）（下山・林ら，1983）、⑥生活充実感尺度（高橋，2010）、⑦夢の有無で構成した。

3. 結果と考察 夢の有無によって、調査対象者を2群に分けた。「夢あり群」は578名、「夢なし群」は51名、無記入は60名であった。各群において夢志向尺度の各下位尺度得点を算出し、平均値の差の検定（t検定）を行った結果、「夢あり群」のほうが有意に高い得点となり、夢の有無により夢に対する態度や考え方に変化が生じ、夢を持っていないことで積極的な態度だけでなく、夢の重要性も低く感じてしまうことが示唆された。

夢要因とキャリア意識が夢志向に与える影響、同様に、夢志向が学習意欲、生活充実感に与える影響について検討するため重回帰分析を行った。その結果、夢志向はキャリア意識、夢要因いずれのほぼすべての下位尺度から有意な正の影響を受け、夢志向が学習意欲や生活充実感に大きな影響を与えていた。

### 【総合考察】

本研究では、児童期後期を対象として、夢の有無と夢志向尺度、夢志向尺度と夢を持つ要因と考えられた夢要因やキャリア意識との関係、夢を持つことでの効果と考えられた学習意欲や生活充実感との関係が明らかになった。したがって、夢を持つことにおける要因、効果といった関係は量的にある程度把握できたと考えられる。この結果は、新見・前田（2008, 2009）の小学生、中学生を対象とした研究を支持した。その上で、その両者（キャリア意識、学習意欲と適応感）の媒介に、夢に対する態度や考え方があるということが本研究で確認された。

JSL 児童はオノマトペの何に困難を感じるのか？

日本語教育領域 本 多 宏 美

1 はじめに

オノマトペ（擬音語・擬態語・擬情語）は JSL 児童にとって学習や生活に欠かせない重要な語彙であるものの、感覚的な語であるため（秋元,2007）習得が難しく CALP（学習言語能力）の妨げになっている可能性が高い。そこで本研究では、JSL 児童がどのようなオノマトペを学校で習い、そのうち、どのオノマトペに困難を感じているのか、そして、それは何に起因するのかを明らかにする。

2 課題

〈課題 1〉 小学校 1・2 年生でどのようなオノマトペを学習しているか。

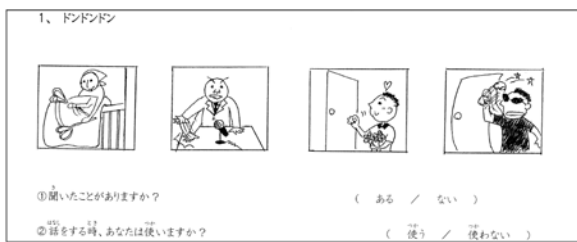
〈課題 2〉 2-1) 擬態語・擬音語・擬情語間に、習得における困難の差はあるのか。2-2) どのオノマトペに困難を感じるのか。2-3) その困難は何に起因するのか。

〈課題 3〉 オノマトペに困難を感じているのか。

3 調査方法

〈課題 1〉 小学校 1・2 年生の国語教科書（光村図書）に出てくるオノマトペを調査・分類する。

〈課題 2〉 教科書のオノマトペを取り上げ、横浜市内小学校 JSL 児童 24 名（5 年生 11 名・4 年生 13 名）を対象に絵による 4 択のテストを行う（資料 1）。



資料 1 テスト設問例 ※阿久津（1994）、山本（1993）、富川（1997）を参考にし、筆者作成

〈課題 3〉 オノマトペ困難度の意識調査を行う。

4 調査結果と考察

〈課題 1〉 について

国語教科書には、述べ語数・異なり語数共に、擬態語、擬音語、擬情語の順に多く出現する。擬情語は述べ語数と異なり語数が同じだが、擬音語、擬態語は

異なり語数が述べ語数よりも少ない。

〈課題 2〉 について

2-1) 擬情語の正答率が一番低い（図 1 参照）。擬情語は JSL 児童にとって習得しにくい語だといえる。

2-2) 同じカテゴリーに属する、意味的に近いオノマトペの習得は難しい（図 1 参照）。このようなオノマトペは典型例や簡単なルールを説明することが有効な手段の一つであると考えられる。（指導例「ぴかぴか」…磨いた靴や窓、磨いた後のきれいな状態を表す。「きらきら」…宝石や星）

2-3) 「聞いたことがある」だけではなく、実際に「使う」ことが習得につながっている（表 1.1、1.2 参照）。さらに、オノマトペを場面と対応させて記憶していることが推察された。オノマトペは場面とともに教えることが効果的であるといえる。

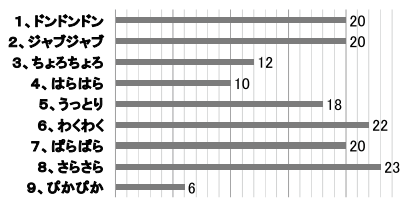


図 1 ミニテスト(イラスト四択)の正答数

表 1.1 「聞いたことがある」のみ選択した児童の正答、誤答数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
「聞いたことがある」	13	18	17	12	13	4	14	10	9	110
正答	12	15	9	3	10	4	12	9	3	77(70%)
誤答	1	3	8	9	3	0	2	1	6	33(30%)

表 1.2 「聞いたことがある」+「使う」を選択した児童の正答、誤答数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
「聞いたことがある」+「使う」	4	4	2	3	5	12	5	11	9	55
正答	4	3	1	3	4	12	4	11	3	45(82%)
誤答	0	1	1	0	1	0	1	0	6	10(18%)

〈課題 3〉 について

擬情語が一番難しいと感じる児童が最も多い。

1) テストの得点、2) 「オノマトペを難しいと思うか」、3) 「国語は好きか」、の 3 つには関連性が見出された。オノマトペを習得することが教科書の文章理解を深め、国語が好きになることにつながる可能性が高いと推測された。

5 ポスター発表実施報告

①母語の影響の可能性、②日常生活内のオノマトペにおける影響の可能性について指摘を受けた。今後の課題としたい。

**高校生の抱く英雄のイメージと国語教科書**

教育デザインコース 国語領域  
12AW148 長島 裕太

**調査動機**

**(1) 英雄を調査対象とする理由**  
英雄＝民衆が夢や希望を託していた人物。(ex.伝説、芸能など) ※当時の民衆の夢・願いを知る手がかりとして英雄像を見ていく

歴史上の人物
社会集団の規範  
…教科書など

民衆の夢・理想  
…伝説、芸能など

↓

英雄

豊田武(1976)  
→歴史上大きな働きを示した。民衆の望みと夢をかなえた。

嵐山住明(1979)  
→社会集団の理想を実現もしくは体現。

・各時代の英雄像を追っていくことで、その時代の人々が理想とした人物像を明らかにしたい。

**(2) 国定教科書中の英雄―義経の割合―**  
・義経は国定国語教科書への登場回数が多い人物(唐澤富太郎 1990)。  
【採用された教材】  
「牛若丸」「ひよどり越」「扇の的」「弓流し」「黄瀬川の対面」  
・V期(S16年～S20年)の教師用書では、「ひよどり越」の奇襲が**真珠湾攻撃**と結びつけられる。  
  
↓  
○戦後、義経教材は墨ぬりの対象に。  
○戦後の教科書から事実上抹消された。

**(3) 疑問**  
・現代において「英雄」という言葉はどのように捉えられ、どの程度影響力を持っているのか。  
→教育インターンにてアンケート調査を実施。

**(2) 実施結果**

[A 高等学校] 対象: 52 名
[B 高等学校] 対象: 115 名

〈質問 1〉  
あなたが「好ましいと思う人物」は誰ですか。実在の人物、架空のキャラクターのどちらでもかまいませんので、自由にお書きください(一人)

○漫画・アニメなどのキャラクター、または芸能人を挙げる生徒が多数。  
○特定の人物が多く挙げられることはない。

〈質問 2〉  
あなたが**歴史上の人物(物語中)の中で**「好ましいと思う人物」は誰ですか。自由にお書きください(一人)。

**※回答の多かった人物。**  
5 回…ヘレン・ケラー (10%)  
4 回…坂本龍馬 (8%)  
19 回…無回答・無効 (35%)

**※回答の少なかった人物。**  
9 回…ヘレン・ケラー (8%)  
5 回…坂本龍馬 (4%)  
4 回…豊田秀吉、ナポレオン (3%)  
22 回…無回答・無効 (19%)

・挙げられる人物に統一性はない。  
・無回答の割合が高い。

〈質問 2〉  
①に記した人物について、あなたがその人物を好ましいと思った理由をお書きください。

〈質問 2〉  
②で挙げたもの以外に、あなたがその人物に抱くイメージとして当てはまるものがあれば、以下の選択肢からお選びください(複数回答可)。

○その人物の行った業績や、精神的な側面(「民のためになることをした」「自分を犠牲にしてまで〜した」など)の回答が多い。

〈質問 2〉  
あなたは①であげた歴史上の人物の活躍をどのような方法で知りましたか。当てはまるものを次の選択肢から選んでください(複数回答可)

※B 高校の回答

○学校の授業、または教科書・資料集の選択肢が過半数。  
○ゲーム・漫画・テレビなど、サブカルチャーからの影響も一定数ある。

**〈考察〉**  
○歴史上の人物に親しみを感ぜられない生徒が一定数存在。同時に、ある人物のイメージを形成する媒体として学校教育は大きな影響を持つ。

**Ⅲ、まとめ**  
(参考)「英雄」と言われて思い浮かぶ人物は誰か。(対象: 横浜国大生 55 名)  
結果: 現代に生きる人物から歴史上の人物、または身近な人など、挙げられる人物は多岐に渡っていた。→「英雄」という概念の希薄化

○現代において「英雄」という言葉に特別な価値は込められていない。  
→教育現場でタブー視されてきたことと関係があるか。  
○歴史を学校で学んでも身につかない生徒がいる。その一方で、学校の授業を通じてある人物の活躍に親しみを覚えた生徒も少なからずいる。  
○学校教育が持つ、人物像形成への影響力の大きさ。

**〈今後の展望〉**  
○「英雄」という概念が現代では希薄化してきているのではないか。大学一年生を対象に追跡調査を行う(11/6 予定)  
○近世以前の古典を教材として取り扱うときの入口として、「英雄」として見られていた人物を用いることはできないか。  
→当時人気を博していた理由、その人物像の要素としてどのようなものがあるか。その要素は現在にも通じるものなのか。

## 2 ポスター発表の成果

多くの方々からご意見・ご質問を頂くことができた。特に教育委員会からアンケートの内容について指導があったことは、教育現場との意識の差を如実に示す例として注目している参加者が多かった。教育インターンという制度を実施していく上で、現場との連携を密に取らなければならないということ、反面教師としてではあるが示せたかと思う。

## 3 今後の展望

質疑の中で、現代では「英雄」という言葉が馴染みの薄いものであり、思い浮かべる人物もその時の時代相や流行の影響を受けやすいものであるという意見を聞くことができた。この点については「英雄」として挙げられた人物とその理由を関連づけて今後検討を行っていく必要がある。また、発表者自身の「英雄」観の認識の甘さや、教育との接点があまく見出せていないという点などについてご指摘をいただいた。辞書的な定義の難しい概念であるからこそそのような

## 1 発表内容

「英雄」とは民衆の理想が仮託された人物である。その一方、国民の規範として「英雄」が利用されることもある。国定教科書の中で義経の鶴越が真珠湾奇襲に結びつけられたのもその一例である。教育インターンでは、高校生と大学生を対象にアンケート調査を行い、現代の「英雄」観を検討した。その結果から、現代では「英雄像」が個人によって多様に捉えられており、「英雄」という言葉に特別な価値はないことがわかった。

対象を扱っていくのかという点を明確にし、アンケートにもそれを反映させていく必要があるだろう。後者については古典教育の全体的な流れの中で「英雄」という概念をどのように位置づけることができるのか、今後検討を加えていく必要がある。

これらの点をもとに大学生を対象にした追加調査を行い、現代の「英雄像」の一端を明らかにしていきたい。



日本人大学生の受容的な語用論的能力の差と指導の可能性

英語領域 竹中 恵 太

1 概要

Fukazawa (1997) では異文化間でのコミュニケーションの機会が急速に増えてきている一方で、社会文化的な状況を学ぶ機会が少ないことを指摘している。さらに Fukazawa (2003) は、社会文化的な状況とかい離れた状況が重大なミスコミュニケーションを引き起こしかねないと主張し、そのような状況を含めた指導の重要性を示唆している。実際に Takimoto (2006) では依頼表現や謝罪、断りの方法が言語によって異なり、母語話者と非母語話者の語用論的なパフォーマンスの違いを生み出してしまうと主張している。

そこで本研究では、首都圏に通う文学部英語英米文学科の大学1年生を対象に依頼表現の受容的な語用論的能力の発達の違いを調査した。研究参加者96名をTOEIC-IPの得点でHigh:20名(平均点519点)・Mid:39名(平均点430)・Low:37名(平均点329点)に分けた。3グループを対象に調査し、語用論的知識を測定した。

受容的な語用論的能力を測るために青木(1987)のReceptive testを本研究で利用した。ペンを借りるという状況における22種類の依頼表現にそれぞれ、「より丁寧(+1)・普通(0)・丁寧でない(-1)」の3つの基準で判断するものである。

今回の調査で、青木(1987)が英語母語話者(22名)に上記と同じ語用論的知識に関するReceptive testを実施した結果と、今回の研究結果を照らし合わせたところ以下ようになった。

(差の大きかったもの上位3つ)

学習者	母語話者	依頼表現
-0.251	-1	I'll borrow ...
-0.134	-0.818	I want to borrow...
0.592	0	I'd like to borrow...

上記のような差の要因として、Fukazawa (2003) では“authentic input”の重要性を主張している。Fukazawa (1997,2003) では教材のコンテキストなどへの言及の少なさが語用論的能力の違いを生む要因として指摘していた。

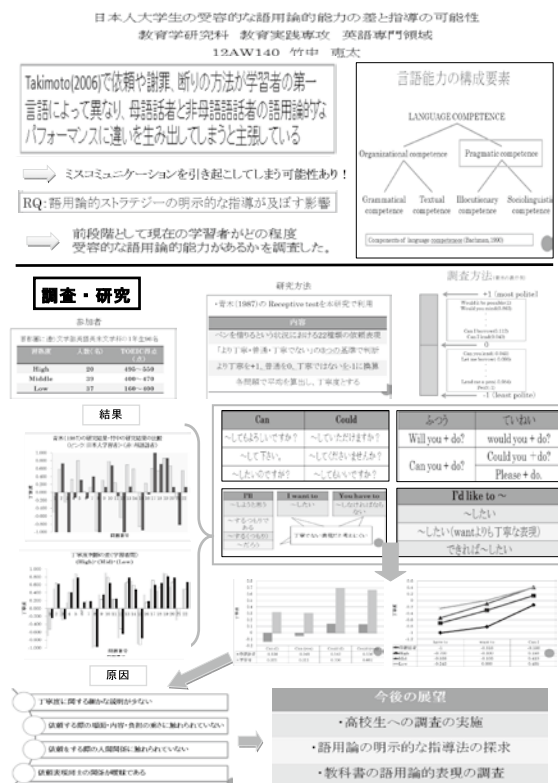
このため、Oral Communication1の教科書を発行し

ている12社(東京都の高校が採択している教科書の約90%をカバーする)を分析したところ、依頼表現について明示的に説明されているものが3社であった。

今後、全ての教科書の調査やより幅広い学習者の語用論的能力の調査を進め、明示的な説明や社会文化的な状況の説明を含めた指導の効果も探求していきたい。

2 実施報告

教育デザインフォーラムにて発表の際に「丁寧表現の認識がこんなにも違っていることを知り驚いた」「より習熟度の高い学習者も研究対象にするのも興味深い」というコメントを受けた。これらの意見を基により深い考察を行い、本調査に反映したい。



1 本研究の内容

本研究では、日本人大学生のライティング力向上のためのコメンタリーの効果を比較するため、Lee (2008) が提唱する3種類(文法・内容・構成)のコメンタリーの効果を測定した。その背景として、ライティングは本来コミュニケーションのツールであり、ライティング力を向上するために内容にもフィードバックを与えたほうがよいということが言われている。

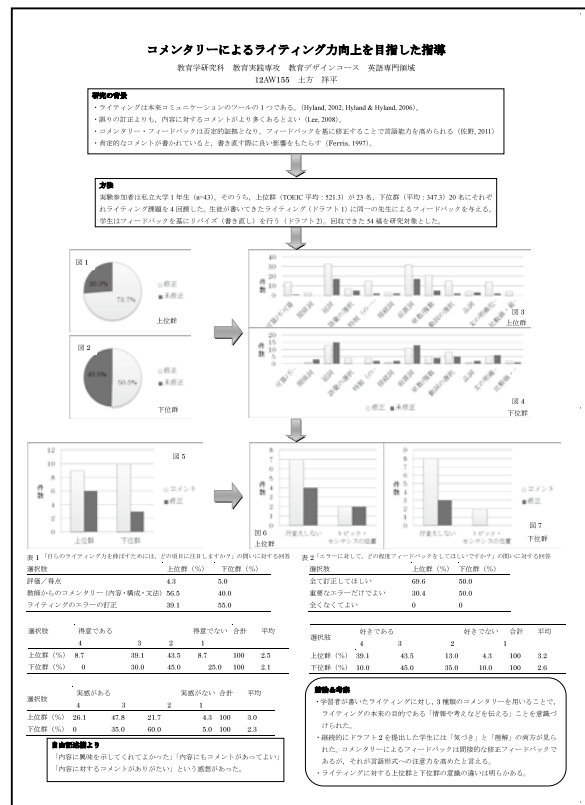
研究参加者は大学生43名であり、TOEICの点数で2群に分けた。上位群は平均521.3点(SD=36.7)、下位群は平均347.3点(SD=48.7)であった。両群には同一の授業者がコメンタリーを与えたため、授業者による差はない。実験では、大学生が書いたライティングにコメンタリーを与え、それを基に書き直したライティングを比較し、ライティングの質と量がどう変化したかを測定した。文法に関するコメンタリーでは英文法の誤りを扱い、構成に関するコメンタリーではパラグラフの構造に関する誤りに対してコメントし、内容に関するコメンタリーではライティングの内容に関する授業者からの感想が書かれていた。

その結果、効果の違いはあったものの、両群のライティング力に変化が見られた。より詳細に分析するために、授業者からのコメンタリーを分類した所、文法に関するコメンタリーや構成に関するコメンタリーの中でも、修正に結びつきやすい項目や結びつきにくい項目が見られた。修正に結びつきにくい項目には、より修正点を詳細に記述するなどフィードバックの方法に工夫する必要があると考えられる。

内容に関するコメンタリーを生徒がどう受け取るのか自由記述をしてもらった。その回答では「内容についてのコメントがあっよかった」という主旨の内容が複数見られた。これらの回答から、内容に関するコメンタリーを与えることで、学習者はライティングがコミュニケーションのツールであることを意識したと言える。本研究では、コメンタリーのためのフィードバックを用いてライティング力の向上を図った。研究結果から、英語熟達度に合わせたフィードバックの在り方が考察される。

2 実施報告

教育デザインフォーラムでは研究発表を行った。発表を行った立場としては、当日「なぜ内容に対するコメンタリーをフィードバックとして用いたのか」、「表1では、下位群が誤りの訂正を求めている。データに対する考えを聞きたい」などの質問をいただけたことがなよりの成果である。今回の研究は先行研究であるため、いただいた質問やコメントから、修士論文のりサーチデザインをより明確にできた。





附属学校との学的連携を基軸とした授業研究

社会科領域 渡辺 大 介・宮 川 史 義

1 本研究の目的

本研究は、教科内容研究と授業分析とを通して、附属学校の実践研究と大学の学問研究との双方向的な授業研究を目指すものである。そこで、大学（院生・教員）は授業内容にかかわる教育内容研究・授業分析を行い、附属学校（授業者）はそれらを踏まえて実践するというスタイルをとった。

2 研究内容・・・下記掲載のポスター参照

3 成果と課題・・・下記掲載のポスター参照

4 教育デザインフォーラムでの発表・質疑より

現場の教員の問題意識と近いものがあつたようで、聞き手の多くは学生ではなく、現場の教員であつた。多忙な教育活動の中で、十分な教育内容研究、授業分析ができない状況にあり、大学との連携は魅力的であり効果的であるとの意見を多くいただいた。

一方で、①教科内容研究の成果がどのように授業者に組み入れられたかの分析が不十分 ②授業分析において、児童理解はある程度成果をみたが、学びの理解には十分に到達できていない という課題も残された。

**附属学校との学的連携を基軸とした授業研究**  
渡辺大介・宮川史義（社会科領域）

本発表の一部は昨年度の教育デザインフォーラムで報告されている。今回はその後の進捗について報告する（対象学校は附属横浜小学校と附属横浜中学校の2校）。

**□ 目的**  
教科内容研究と授業分析を通して、附属学校の実践と大学の学問研究との学術的な連携を図る。

**□ 実施経過**

	教育デザイン	教育インターン
	教科書分析 +学問的分野研究 ↓ 公開研究会に関する教科内容研究	横浜小 事前検討会① 事前検討会② 事前検討会③ 授業参観&事後検討会① 10月21日授業分析① ↓適宜、教科内容研究の成果を提示(3回) 授業参観&事後検討会② 1月19日授業分析② 20日授業分析③ 23日授業分析④ 25日授業分析⑤ 28日授業分析⑥ 平成23年度教育研究会 授業参観&事後検討会
	社会科教育実践分析	横浜中 事前検討会① 事前検討会②
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
1		
2		
3		

**□ 研究内容**  
【コア科目】  
1 春学期\_授業づくりにおける教科内容研究（各自の専門領域と横浜中学校の研究会での単元とを勘案して、以下を担当。分析箇所は）

(1) 教科書分析  
歴史—「現代史分野」の記述分析。  
地理—「人口」、「交通」、「産業」、「エネルギー」、「食料」、「環境問題」の6つの分野の記述分析。  
※単なる記述の比較だけでなく、その背景にある人文、社会、自然科学等の研究蓄積を加味した分析に取り組んだ。

(2) 社会科教育実践史（近代史学習）における代表的な実践の分析  
ただし、横浜中学校での公開研究会での単元-地理的分野が判明した7月まで。  
2 秋学期\_附属学校公開研究会での授業づくりにおける教科内容面でのサポート  
以下の2グループに分かれ、研究に取り組んだ。  
(1) 附属横浜小学校  
「八丈島のくさや」を題材にした産業学習；教科書分析及び八丈島の自然的、歴史的経緯、加えて1990年代のIターン現象等についての先行研究をレビューし、授業者へ提示。  
(2) 附属横浜中学校  
弘明寺周辺を題材にした地域調査：人口移動を軸に交通手段や住宅地の変遷について先行研究をレビューし、授業者へ提示。  
【インターン科目】  
横浜小学校における授業参観を行い、抽出児（10名）の分析を院生それぞれ担当を決め、分析結果を適宜、授業者へ提示し相互検討をした。

**□ 成果と課題**  
1 受講生  
(1) 教科書分析と先行実践分析  
専門領域における学術的な知見を組み入れた教科書分析は一定の成果をみた。学ぶ側の視点を取り入れた記述のあり方についての分析は課題として残された。また、安井俊夫や本多公栄の実践を分析したがその視点が定まらず、秋学期以降は教科内容研究ご進められたために、不十分な段階にとどまった。  
(2) 教科内容研究  
授業づくりにおける教科内容研究の必要性やその取り組み方（研究資料の所在・分析方法等）について一定の知見を得ることができた。更にそれらを進展するための学術的なスキルの習得が課題。また横浜中学校では実践のねらいとの齟齬が生じるという課題も残された。  
(3) 授業分析  
平均2名程度の抽出児をそれぞれ担当したが、その分析が授業展開や教材や発問等との関連でなされる者と性格的な側面にとどまる者との差が大きかった。事後検討のあり方の改善が必要。  
2 附属学校教員  
横浜小学校：教科内容研究でのサポートを通して教材についての多面的な視点を持つことができた。また、抽出児の学習を取り入れた授業記録・分析は多いに役立った。  
横浜中学校：教科内容研究でのサポートを通して、個別の調べ学習を収束させる視点についての手がかりを得ることができた。

1 発表内容の概要

本研究では、歴史的変遷における基本図形の定義指導の2つの立場の特徴を比較し、現行のカリキュラムを再構成するための示唆を得ることを目的としている。

算数・数学科の指導において、児童・生徒が数学を創り出す過程を大切にしながら、その活動を通して数学的な見方や考え方を体得させることを目指す場合には、子どもの認知発達段階を考慮して、それに応じて指導内容を考えていく必要がある。このような観点から、図形領域の指導において、とりわけ基本図形をいかに定義するか、という点に焦点を当てると、現行の指導系列を再考されるべきであると考えられる。

我が国の算数・数学教育においては、過去には現行とは異なる立場をとっていた時代があった。具体的には、長方形を「4つの角が直角である四角形」と定義するのが現行の立場であるのに対して、「4つの角が直角で、となり合っている辺の長さが違う四角形」と定義するような立場である。

我々は普段、長方形と言われれば後者のようなイメージを持っているのではないだろうか。それではなぜ、現行では前者のように定義されているのか。そこには、現行においては包摂関係（例えば、正方形は長方形の中に含まれるという関係）の指導を行うようになっているという点が大きく関わってくる。すなわち、後々包摂関係として図形をとらえていくことを見通して、先を見通して不都合が生じないように、初めからその定義によって基本図形を規定しているのである。しかしながら、このような立場は、数学を創り出す過程を大切にするという観点からは疑問符がつく。既成の数学の世界において妥当なものと、学習時の児童の素朴な考えから導かれるものとの間に食い違いが生じる可能性があるからである。

このような点から、過去に採られていた立場にも現行とは異なる価値があったとも考えられる。ここでは、それを再評価し、両者の一長一短を明らかにすることで、現行のカリキュラムを見直すための示唆を得ることを目指した。

2 教育デザイン発表会の実施報告

ポスターセッションの形式によって、他領域の方との双方向のやり取りを行うことができた。それぞれの方の専門領域ごとの観点に基づいたご意見は大変新鮮なものであり、様々な切り口からの示唆を与えていただくことができた。

例えば、言葉の定義を考えるのならば、我々が漢字を用いている以上、中国における由来を調べ、言語学的な視座からも迫った方が良いとのご指摘をいただいた。今回、自らの研究領域と他の領域との接点に気付かされる良いきっかけとなったと感じている。

基本図形の定義指導のあり方に関する研究

—包摂関係の指導を見通して—

小泉 健輔

教育学研究科 教育実践専攻 教育デザインコース 数学専門領域 修士2年

Q.長方形の定義は次のうちどれでしょう？

- A. 正方形をのばしたような四角形
- B. 4つの角が直角であり、隣り合う辺の長さが違う四角形
- C. 4つの角が直角である四角形
- D. 4つの角が直角であり、2つの対角線が等しく、2つの向かい合う辺が平行な四角形

正解は・・・

C. 4つの角が直角である四角形

このように定義することで、隣接にこの条件を満たす正方形も長方形に含まれる関係（包摂関係）が生じる。



別冊中学校での調査結果  
中1・中2の7割以上が誤認識を起こしている。

目的の対立概念を捉える

上位概念の持つ性質が、下位概念にそのままあてはまることを使って思考の節約をはかることができる。

包摂関係の指導上の価値

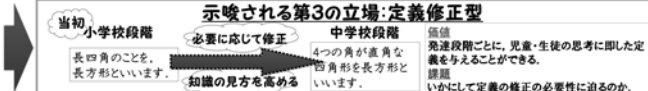
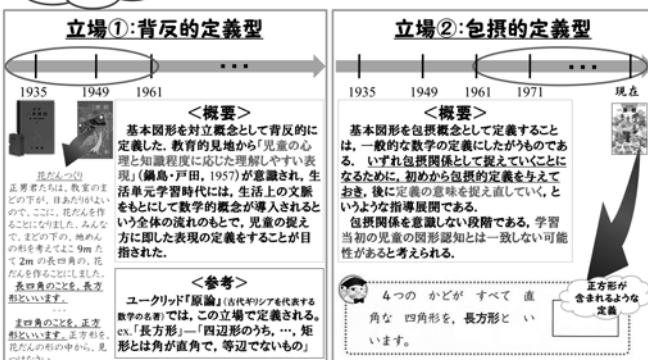
中1(1968) 包摂関係を前提として図形を体系にまとめることを通して、児童に論理的な思考をさせ、その能力をのばすこと。

But

いかに定義するかを再考する必要はあるのでは？

歴史の変遷をたどると・・・

これまで、基本図形の定義は2通りで指導されてきたことがわかる。包摂関係の指導の観点から、その一長一短を明らかにした研究はなされてこなかった。



【主要参考文献】 中島建三(1968). 「論理的思考力の育成と児童の概念の発現について」、日本教育学会誌、教育学部論究、Vol.15 - 16, pp.90-97. 編島信太郎・戸田清(1957). 『算数教材研究講座第3巻』、金子書房、p.26,31.

# 温帯低気圧・台風の可視化と気象教育への応用

理科領域 北内達也



図1 発表したポスター

## 1 諸言

可視化とは、人間が直接「見る」ことのできない現象・事象・関係性を「見る」ことのできる形(画像・グラフ・図・表など)にすることである。可視化のメリットとしては、シミュレーションや観測から得られた数値データを視覚表現に変換することによって、対象の直感的理解や効果的解析を支援することができる。

理科授業の気象単元において、温帯低気圧や台風といった気象現象は、教室で直接実験をしたり、観察したりすることが難しいテーマである。そのため、そのような気象現象を可視化した視覚化教材を活用して授業を行うことは他分野の学習に比べ、生徒の理解を助けるのにより効果的であると思われる。この可視化のメリットを生かし、気象教育に応用しようと考えた。

## 2 教育インターン

附属横浜中学校第2学年3クラス130人を対象に視覚化教材を用いながら授業を行い、子ども達が具体的にその現象をイメージしながら理解を深めることができたかを、授業後アンケートにより確認した。単元は温帯低気圧の「前線の通過と天気の変化」について担当した。利用した教材は以下の4つである。

- ・ 観測データにより作成した図、表
- ・ 定点カメラによる前線通過時の動画
- ・ 気象情報可視化ツール Wvis
- ・ 局地天気図

授業の最後にアンケートを行い、全生徒130人中120人の生徒から「理解の助けになった」という回答が得られ、視覚化教材の活用が有効であったと考えられる。また、実際に理解の助けになった視覚化教材を挙げてもらうと Wvis と前線通過時の動画を挙げる生徒が多く、動く教材が生徒の理解の役に立ちやすかった。

授業で視覚化教材を用いることで、前線通過という現象により、どのような気象要素の変化が起こりえるのかを生徒に容易に伝えることができた。また、アンケートの結果より、Wvis は生徒の考えを助ける教材として役立ったと考えており、指導側に便利なツールであった。今までの教科書だけを用いる平面的な気象の授業に視覚化教材を用いることで授業の質を高めることができ、目的を達成できたと考えている。

## 3 教育デザインフォーラム発表の成果

発表後の質疑応答では参加者から、気象教育における気象教材の需要が高いことを指摘していただき、より良い気象教材の開発の必要性を感じた。また、視覚化教材の導入の有無で生徒の理解度を比較し、効果を確認してはどうかという意見もあり、今後の課題も見つかった。

【研究目的】

台風や豪雨などの激しい気象現象が起こると予想されるとき、気象庁、官公庁などから防災情報が発表される。しかしその情報が、必ずしも人的・物的被害軽減に直結しているとは言えない。それは情報の受け手側に、行動判断のための情報読解力が必要とされるからである。本研究は緊急時における教員の適切な対応(防災力)は何かを導きたく、過去の事例を挙げながら考えていく。

【ポスター発表】

実際に行政から発表されている各種防災情報を概念図として図示し、被害発生の可能性を持つ情報に切り替わるまでを、段階的に示した。情報の発表が始まったときから、被害発生までの時間経過の中で、どのタイミングでどのような意思決定を下していれば、防災に繋がったのかを捉えていく。

事例1、2については台風の大雨により発生した河川の氾濫、土砂崩れの現象と、そこから起きた浸水被害、人的被害の例を取り上げた。事前情報の種類も多く、警戒態勢も整った上で起きた被害に、どんな原因があったのか。情報の受け手側はどんな判断をして当該地域への台風の襲来に備えていたのかを検証した。

事例3は夏の不安定性降雨による局地的豪雨の現象と、そこから起きた突発的な河川の水位上昇による人的被害の例を取り上げた。大雨への警戒を促す、大雨洪水警報が発表されてからわずか1時間での被害の発生という結果は、事例1、2で挙げた台風に備えた時間的、量的にも多くの防災情報が発表されていた事例とは特徴が異なる。

このように防災情報の取り扱い、各々の気象現象を捉えた上で、時間的な猶予がどれだけ残されているかなどを考えなければならない。土地の特徴、時間、現象について、その時に応じて優先すべき警戒内容を捉える能力を身につけ、率先避難者として、生徒に明確に避難すべき理由、方法を指し示すことが必要であり、それを習得する演習を提案した。

実際に起きた事例に基づき、災害に至った経緯の把握、問題点の分析を行う。自分が例をあげた災害事例

の当事者ならばどのような意思決定をするのか、または警報の出された状況で生徒に対してどのような対応をするのか。思考過程、作業を繰り返して学習する。

【聴衆者からのコメント】

近年は警報の種類が増え、発表されるすべての警報について対策を取ることが難しいため、情報の取捨選択の参考にしたい。(現職教員)

【成果】

神奈川県内における災害事例について質問を受けたら、実際の授業における実践内容の質問があったりしたこと、質問者は災害が身に降りかかることを、我が事として受け止めたのではないかと考えている。この意識こそが防災に対する一番大切なものであり、発表は一定の成果を得た。

**災害事例より検証する 防災力を育む気象情報の利活用**  
 横浜国立大学大学院 教育学研究科 理数教育専攻 修士2号 根来都子

**目的**  
 気象庁や行政から発表される防災情報は、必ずしも人的・物的被害軽減に直結しているとは言えない。それは情報の受け手側に、行動判断のための情報読解力が必要とされるからである。本研究は緊急時における教員の適切な対応(防災力)は何かを導きたく、過去の事例を挙げながら考えていく。

**防災情報 概念図**  
 防災情報 → 防災準備情報 → 避難準備情報 → 避難指示  
 防災情報 → 大雨警報 → 土砂災害警戒情報 → 避難指示

発生年月日 経緯	概要	検証事項・検討事項	検証に際しての課題
1 平成22年9月21日 台風15号	大雨・急激な水位上昇 河川、河川氾濫 2人 浸水被害 6人 土砂崩壊 217箇所 人的被害発生	大雨警報、土砂災害警戒情報、避難指示	避難指示、避難の必要性、避難のタイミング、避難の場所、避難の方法、避難の準備、避難の連絡、避難の報告、避難の記録、避難の振り返り
2 平成22年9月2日 台風12号	大雨・急激な水位上昇 河川、河川氾濫 28人 浸水被害 1,000箇所 土砂崩壊 600箇所 人的被害発生	大雨警報、土砂災害警戒情報、避難指示	避難指示、避難の必要性、避難のタイミング、避難の場所、避難の方法、避難の準備、避難の連絡、避難の報告、避難の記録、避難の振り返り
3 平成22年7月22日 局地的大雨	大雨・急激な水位上昇 河川、河川氾濫 2人 浸水被害 10箇所 土砂崩壊 1箇所 人的被害発生	大雨警報、土砂災害警戒情報、避難指示	避難指示、避難の必要性、避難のタイミング、避難の場所、避難の方法、避難の準備、避難の連絡、避難の報告、避難の記録、避難の振り返り

**事例の分析**  
 事例1,2,3の共通点: 大雨による河川の水位上昇、浸水被害、人的被害発生  
 事例1,2の共通点: 台風による大雨、急激な水位上昇、河川の氾濫、土砂崩壊、人的被害発生  
 事例3の共通点: 局地的豪雨による大雨、急激な水位上昇、河川の氾濫、浸水被害、人的被害発生

**実践的応用に向けた課題**  
 過去の事例(過去型)を基に、生徒に「防災力」を育むための実践的応用に向けた課題を提示し、生徒が主体的に課題を解決できるように指導する。

**課題**  
 「防災力」を育むための実践的応用に向けた課題を提示し、生徒が主体的に課題を解決できるように指導する。

## 工業高校の技術教育から捉えた中学校技術の重要性に関する一考察

技術領域 大島美音

### 1 背景と目的

中学校技術・家庭科(技術分野)(\*以下「技術科」)は、義務教育9年間で唯一の技術教育であり、高等学校普通科に進学する生徒にとっては、12年間で唯一の技術教育を受ける機会となる。一方、高等学校工業科(\*以下工業高校)では、高度な技術教育が指導され、教育インターン先として選んだA高校は、工業科の専門高校として高度な技術教育を指導しつつ、更に理工系大学・大学院への進学を想定した教育も行っている。このような高等学校に通う生徒は、小中高12年間の半分の6年間、技術教育に触れつつ大学進学を目指しているため、技術に対する興味は高いと想定される。よって本研究では、工業科目(\*以下「工業」)において技術教育を受けた生徒たちへ技術に対する興味等の調査を行い、技術に対する興味の変遷を明らかにし、3年間しか技術教育を学ばない生徒等に対し「技術科」においてどのような内容を取り入れれば、技術に対する興味を喚起できるかを検討することを目的とする。

### 2 方法

工業高校に通う生徒を対象に「技術科」、「工業」に関する内容のアンケート調査を行った。このアンケート調査結果を検討、また「技術科」のカリキュラム、「工業」のカリキュラムの比較を行うことで、両者の繋がりについて検討をした。対象はA高校3年建築科の生徒30名(男子15名、女子15名)であり、授業風景の観察も行う。

### 3 結果と考察

「技術科」は高校への進路選択にあまり影響を与えていないが、技術的な内容に対する興味は半分近くの生徒が持っていた。また、高校での学習を経た現在の方が技術的な内容に対する興味は上昇しており、今後の進路として引き続き建築について学びたいと思っている生徒が約半数いた。…①また、学習内容に関して、「工業」よりも「技術科」の方が日常生活で役立っていると感じているがそれを中学校生活の中で実践的に活かす場面は少ないと感じていた。…②

結果①により、「工業」の専門性を一部取り入れる

ことで、技術科に対しより興味を深めることも出来るのではないかと考えられる。しかし、「工業」と「技術科」では目的や環境に違いがあるため、単に真似をすることが良いとは限らず、また制度面においても簡単に近づけることは出来ない。そこで結果②に着目をする。「技術科」を生活に直結する部分から取り扱うことで、まずは生活の中の技術により深く興味を持たせ、それと関連づけて基礎的・基本的な知識及び技術の習得に繋げていけるようになるのではないかと。授業内容により身近な生活技術を取り入れ、例えばそれを総合学習や文化祭等の場面で実践的に活かしていく等、他教科も含めたカリキュラム全体の中で技術的な内容を取り扱うことで、技術科の授業内容がより有効になるのではないだろうか。

### 4 まとめ

「工業」の専門性を一部取り入れることで、技術教育としての効果を高めることが期待出来ると考えられるが、現状では難しい。そこで、生活に直結する技術を取り扱い、より「技術科」に興味を持たせることで、知識・技術を深めることが出来るのではないかと。

### 5 当日の成果

技術・家庭科は勿論、様々な領域の先生方や学生から意見やアドバイスをいただき、有意義な時間を過ごすことが出来た。また、他教科から見た技術科の位置づけや重要性についても改めて見直すことが出来た。

市民活動支援の現況と方向性  
—横浜市の公設中間支援組織を事例として—

家政領域 大塚 雄一



た市民活動団体があり、他の自治体に比べ比較的活発である。横浜市には約 1300 の NPO 法人があるほか、横浜市役所が条例に基づき 2002 年に設置した横浜市市民活動支援センター（以下市版センター）には約 700 団体が登録している。横浜市役所は 2008 年までに区民活動支援センター等（以下区版センター）を生涯学習支援センターと複合化して全 18 区に設置した。各センターは、非営利性・自主性・公益性・属地域性を要件として市民活動・生涯学習団体を支援している。

3. 「教育インターン」における調査の目的・方法

横浜市における公設市民活動支援組織の機能と状況に関する情報を得、現状を把握することを目的とし、市版センターで 6 日間のインターンを行った。各種会議にオブザーバーとして参加したほか、センターの各種業務に従事した。

4. 市版センターの状況

市版センターの機能は、市民活動に対する支援と、行政との協働に関する事業に大別できる。市民活動現場に対しては、市民活動全般に関する相談（2011 年度 1,182 件）、情報提供、ネットワーク構築、マネジメント支援、調査等を行っている。行政に対しては、各部局・区役所との連携・協働、区版センターの運営支援、地域運営に関わる人材の育成などの面において機能している。

5. 発表時の状況

参加者からは、運営主体の変遷を詳細に調査することにより横浜における市民活動支援の方向性・特徴が明らかになるのではないかと、東日本大震災による被害を被った地区における状況を検討することも興味深いであろう、等のコメントがあった。

1. 研究の背景

生活者である市民は、生活資源のコントロール主体である。自発的な市民が、人・モノなど点在する多様な諸資源を結びつけて、様々なテーマに取り組む活動を市民活動と呼ぶ。市民活動に携わる市民と資源との仲介、および市民活動に対する支援を行う組織のことを、一般に中間支援組織（Intermediary）と呼ぶ。

各地方自治体は過去 15 年ほどの間に、市民活動の場づくりを目的として、市民活動センター等の名称で市民活動支援を行う場を設置している。しかし、その実態はセンターにより様々であり、支援の様相も異なる。

2. 横浜市における市民活動と市民活動支援の状況

横浜市には、行政の機能が充分でない領域に関して、市民が積極的に担おうと先駆的な活動を行ってき

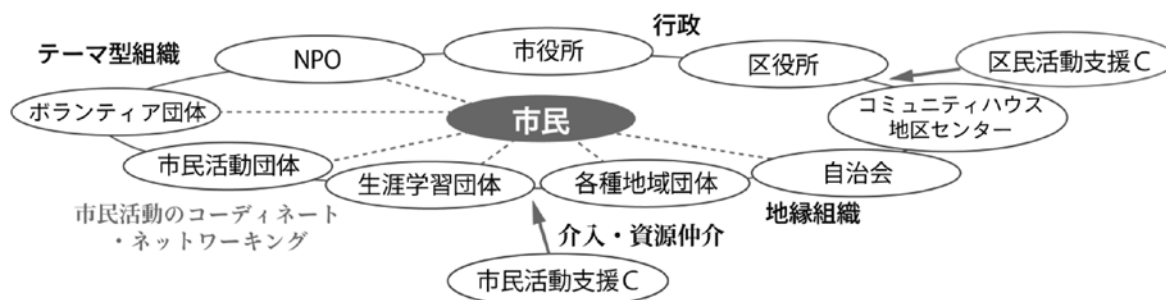


図1 まち環境デザイン・コミュニティデザインの空間において行われる諸主体の活動と支援（概念図）



調理実習・実験を主体とした家庭科の授業に関する研究

家政領域 久保田 正 芳

1 はじめに

「調理実習」という授業はさまざまな課題があると考えている。近年「十分に技術習得はできなくても「手作りの喜び、楽しさ、味のよさ」などを味あわせればよい」(表1)という考え方が増加している。しかしこれは短期的な意欲向上にしかならないのではないかと考える。技術は主体的に実践できる能力と態度を育成するための柱であると考えている。(図1)生涯を通して「調理」への意欲を持たせ、自らの健康を保持・増進し、「食」への関心を「自分事」としてとらえるためには「技術」が柱となるのではないかと考えた。そこで実験・実習を主体とし、技術向上を念頭に置いた授業を展開することによって、生徒の「食」への関心の変化を調査する。

表1 調理実習についての考え方 (%)

生徒	「調理実習」は家庭科の授業の中で最も楽しい	84.6
	「調理実習」は高校で学ぶ必要がある	87.6
教師	十分に技術習得できなくても「手作りの喜び、楽しさ、味のよさ」などを味あわせればよい(小・中・高)	27-33
	時間を工夫し、技能・技術の習得が十分に行えるようにしたい(高)	15-16

※教師は「技術習得の考え方」の回答

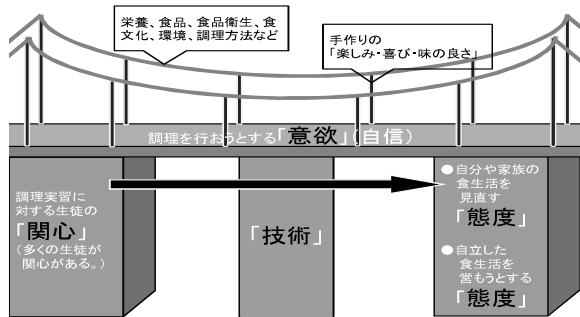


図1 調理技術に関するイメージ

2 調査

まず、選択科目「食文化」を履修している生徒7名に対しアンケート及び包丁の扱いを主とした実習を行った。アンケートでは、「調理の自信」「包丁の扱いの自信」「調理の意欲」を実施前、実施後に聞いた。実習を行ったことによって、「調理の自信」の向上はみられた。しかし包丁の扱いといった技術の自己評価は低下する生徒もみられた。これは、「実際に扱ってみると難しかった」「できると思ってたけどできなかった」といった声があり、食物の学習を通して技術を向上させていく必要がある

あると考える。また、調理をしてみたいという意欲も高いことから、「できないからやらない」といった技術的な点で調理から遠ざかることを避けるため、こういった生徒への支援も必要であると考えている。

表2 アンケート結果

出席者	自宅での調理	調理の自信			包丁の自信			調理をしてみたい			せんざり包丁の本数(mm)	得意(得意)
		実施前1回目7/6	実施後2回目7/6	実施後3回目8/3	実施前1回目7/6	実施後2回目7/6	実施後3回目8/3	実施前1回目7/6	実施後2回目7/6	実施後3回目8/3		
A(m)	1	2	2	2	2	2	2	1	1	2	7.6	低
B(f)	2	2	2	2	2	2	2	1	1	1	2.8	高
C(m)	3	3	3	1	2	2	3	1	2	1	1.9	中
D(m)	3	n/a	2	2	n/a	2	3	n/a	2	2	—	中
E(f)	4	4	n/a	3	3	n/a	3	2	n/a	2	3.8	低
F(f)	4	3	2	2	2	2	2	1	1	1	2.7	中
G(m)	5	4	3	3	3	4	4	2	2	2	3	低

1: 毎日する  
2: 週2~3回以上する  
3: 週に1度程度する  
4: 頻を減らす  
5: 全くしない

1: 自信がある  
2: どちらか、自信がある  
3: どちらか、自信がない  
4: 自信がない

1: すごく思う  
2: どちらか、思う  
3: どちらか、思わない  
4: 思わない

教師から見た包丁の扱いの客観的評価

3 今後

疑問点の確認と仮説の検証を行う。疑問点としては、「栄養」「食品」などの単元について、生徒の持つ技術の高低で関心に影響するのかを確認する。

仮説としては、技術向上がなされた生徒は「食」に対する関心・意欲が高まることが期待され、「栄養」「食品」などの単元に対し積極的に取り組める態度が形成されるのか検証する。

その上で従来の授業展開ではなく、技術向上を念頭に置き、授業計画を再構築していこうと考えている。ただし、教科の目標としては「生活の主体者」を育成することであり、技術向上だけをねらいとしていない。具体的な授業計画は図2に示した通りだが実験・実習を「栄養」「食品」などの単元に組み込み技術習得と科学的な理解が同時に図られるよう食物の学習を展開していく。

指導要領解説にあるように「持続可能な社会の構築に向けて、科学的な根拠に基づいた実践力」が身につけられるようにしていきたい。

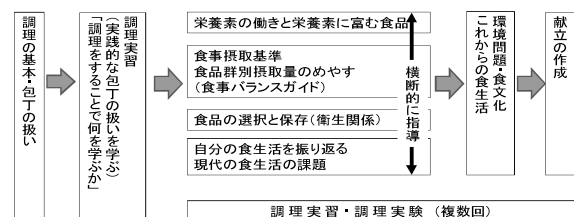


図2 授業計画案



西洋古典技法による体系的な描写法の研究 材料と技法の考察と実践例

美術領域 武田 優作

1 西洋古典技法を用いた表現とその可能性

絵画制作において、描画材の選択は絵の仕上がりを左右するが、その扱い方や描き方の工夫次第ではさらに幅広い表現を可能とする。完成度の高い作品を仕上げするためには、ものの見方やそれを描く技術、そして感性や美意識といった感覚的な部分を日々の訓練によって養い、制作における自分のコンセプトを明確にしていく行為が必要になるが、それを理論的に助ける手段として材料や技法に関する知識もまた必要である。自己の目指す表現に少しでも近づくためには、そして長所を最大限に引き出すためには、自分に合った材料や技法を選び、それを突き詰めていくことが大切になる。そうすることで、表現の技術はより確かなものとなり、そこから更に自己の新たな表現の可能性へと繋げていくことができる。

私は主に油絵具を用いて具象絵画を制作しているが、制作の方向性として、時間をかけてじっくりと密度を高めていき、絵画的な構造にもこだわりながら、より実在感のある表現を目指したいと考えている。私にとって油彩画を描くうえでその性質や使い方は、非常に重要な研究対象であり、形やヴァルールを合わせるだけでは表現しきれない透明性や繊細さは、材料や技法の部分でも深く考察しながら制作していく必要性があると感じている。対象をよく観察したり、そこから何かを感じ取ったりすることは最も重要なことではあるが、それを表現に移すには技術が必要であり、難しいことであるため、日々の研鑽によって高めていかなければならない。そこにはデッサン力をはじめとした修練によって身につける感覚的な部分と、材料や技法などの知識をはじめとした、理論的な部分がある。私は制作における感覚的な部分をより効果的に引き出したり、補強したりするという点で材料や技法の研究を行っている。中世ヨーロッパに描かれた絵画は、画材や色の種類が現代のように豊富でなかったにもかかわらず、今も尚、透明で鮮やかな色彩を保ち続け、400年以上も前の絵画でも優れた保存状態で現在まで伝えられている。それらは画家の高い描写力に加え、伝統的な技法や、化学的な知識に裏付けされた技術に支えられて今日まで残っていると見える。西洋古典絵

画は、現代のように画材や絵具が充実し、それを買って集めて制作するのではなく、むしろ限られたシンプルな材料を用い、合理的な考えに基づいた技法によって描かれており、息をのむような写実性と優れた保存性を実現可能としている。私は複雑な視覚効果や強い実在感のあるフランドル絵画に特に魅力を感じている。色を直に塗り、一気に仕上げるような描き方では得られないような色彩の深みや美しさと、それを裏付ける合理的な考え方は、自己の絵画制作において大きなヒントになると確信している。

2 発表内容

西洋古典絵画が自己の制作においてどのような位置づけであるのか、また、油絵具の長所を引き出す絵具としてテンペラを使った混合技法はどのようなものかを自身の作品を通して発表を行った。そして、少しではあるが学校における美術教育の現状と、合理的な授業方法についての提案も行った。

古典技法による制作は、段階を踏んだ描き進めや乾燥の時間を考慮すると比較的時間のかかる表現技法といえる。しかし、画材も豊富で、画材屋に脚を運ばずすぐにも制作できる環境にある現代で、それでも尚、古典的な技法に倣って制作する理由が発表を通して少しでもお伝えすることができていたら幸いである。

1 背景

日本を自転車で縦断した経験並びに教員を志す過程から。

2. 目的 (一本の糸で世界をつなぐ旅)

ユーラシア大陸を自転車で横断しながら、世界中の子どもを1本の糸で繋げる。目に見えない繋がりを、糸を結ぶというアクティビティーを通し見える繋がりにより、世界が、人がリアルにつながる。そして、土臭いつながりの楽しさ、素晴らしさを関わる子ども、そしてそれを見る大人に感じてもらう。

3. 成果

31カ国を渡り、5000人を超える子どもを繋げた。詳細は <http://coccoconc.web.fc2.com>

4. 目的 (教育インターン)

4.1 旅を通して作ってきた繋がりを日本の子どもにも体感してもらい、世界との距離感を縮め、一体感を感じ、そしてそこに彼ら自身も参加する(糸をつなぐ)ことで繋がる。

4.2 旅の話を通して、偏った情報が溢れかえっている日本の情報社会の現状に気づき、広い視野で物事を捉えようと思うきっかけを提供する。

4.3 旅をした姿を見せることで子ども自身に自分の生き方について考えるきっかけを提供する。

5 子どもへのアプローチ方法

旅での体験を共有しながら、自分が旅を通して何を感じてきたかを伝え、その後世界が繋がった糸の披露並びに糸つなぎを実施、最後に質問や感想を述べてもらい、更に内容を深める。

6 実施状況

横浜市内の小学校を中心に計19校。下記のような子どもの変化が見て取れた。

6-1 子どもの声 (一部抜粋)

「世界にはいろいろな人が住んでいて、それぞれ違った生活をしているのはとてもおもしろい。実際に僕も行ってみたい。」「日本に住んでいると食べ物や水のありがたさがわからなかったけど、実はすごく大切なものなんだと思った。」「私も世界中旅してみたい。たくさんの人と友達になりたい」

7 今後の活動

引き続き旅の話のシェアと糸つなぎの活動を全国規模で続けていく。同時に海外も視野に入れる。訪問前に予め子どもに対し、アンケートを実施、子どもの実態を把握した上で講演後どのような変化があったかを見る。また保護者を含めた講演を行ってきた際、保護者の皆様から自分は過保護すぎたかもしれない、もっと子どもに挑戦させてやりたいなどという声が多く聞かれたため、保護者向けの講演会も実施していく。旅の話を通して、挑戦すること、失敗すること、挫折することの大切さに気づき、各家庭の子どもの将来の可能性を広げることができるとよい。

8 当日の成果

多くの人が足を止め、活動の趣旨、成果を訊かれた。また、世界の現状や、世界の学校事情、旅で自分自身何が変化したかなど、の質問も多々でた。足を止めた人の割合として、日本人よりも留学生のほうが高かった。外国への意識の向け方の違いであろうか。時間、スペースともに不十分な中、可能な限り自分の思い、活動内容を伝え、理解を得られた。



発達障害児の社会性を高める効果的な教材の開発

特別支援教育専修 近藤 春樹

1 内容

川崎市内に設置されている通級指導教室（情緒）には、診断の有無を問わず、発達障害の疑いがあり、特別な支援を必要とする児童が通ってきている。その特徴としてルール、気持ちなど目に見えないことを考えたり、扱ったりすることが苦手であると言える。指導では、目に見えず、わかりにくいようなことをわかりやすく教えていくことが大切になる。その際にICT教材を用いると、集中しやすくなったり、イメージがしやすくなったりすることで内容を理解しやすくなることが考えられる。そこで、各自の課題に応じたICT教材を用いて指導を行い、指導効果の高まりが期待できるかを検証した。

今回、個別指導、小集団指導、それぞれの場面に応じた教材を用意した。個別指導では、各担当者から特に気になる児童をあげてもらい、指導内容を確認した上で教材を作成した。また、昨年度までに作成したICT教材のリストを用意し、適宜使用してもらった。小集団指導では、昨年度に実践した「人とのかわり方」に関する指導プログラムを修正し、実施していった。指導後、児童とその担当者にアンケートを取り、感想を聞いた。

個別指導では今回新たに2つの教材（「気持ちのコントロール・ステップアップ」と「第3の目で自分を見つめよう」）を作成した。

**3-1. 個別指導の教材**  
 \*気持ちのコントロール★ステップアップ  
 \*第3の目で自分をみつめよう  
 \*その他、昨年度までに作成した教材

**3-2. アンケートの結果 I**

学年	担当	評価	よい点	改善点	今後学びたい点	指導の中で活用できるか
ICT教材	C5	5	—	—	自分の気持ちのコントロール	活用できる
	T1	5	4	—	—	活用できる
	C2	5	—	—	自分の気持ちのコントロール	活用できる
小集団教材	T2	4	4	—	—	活用できる
	C3	5	—	—	—	活用できる
	T3	5	5	—	—	活用できる
その他	C4	5	—	—	—	活用できる
	T4	5	4	—	—	活用できる

C:児童 T:担当者

**3-2. アンケートの結果 II**

学年	担当	評価	よい点	改善点	今後学びたい点	指導の中で活用できるか
ICT教材	C5	4	—	—	—	活用できる
	T5	3	3	—	—	活用できる
小集団教材	C5	4	—	—	—	活用できる
	T6	5	4	—	—	活用できる
その他	C7	5	—	—	—	活用できる
	T7	5	5	—	—	活用できる
その他	C8	5	—	—	—	活用できる
	T8	5	5	—	—	活用できる

C:児童 T:担当者

**4-1. 小集団指導の教材**  
 \*はりきりチェンジくん

<1回目> ことばと心の声(Gグループ)、まごころことば(Jグループ)  
 <2回目> 上手に断る(G・Jグループ)

**4-2. アンケートの結果**

学年	担当	評価	よい点	改善点	今後学びたい点	指導の中で活用できるか
小集団	A7	5	—	—	—	活用できる
	A8	5	—	—	—	活用できる
	A9	5	—	—	—	活用できる
	B5	5	5	—	—	活用できる
	B4	4	3	—	—	活用できる
その他	B3	3	—	—	—	活用できる
	B3	3	—	—	—	活用できる
	B3	4	—	—	—	活用できる
	B3	3	—	—	—	活用できる
	B3	3	—	—	—	活用できる

今回の取り組みを振り返ってみると、ICT教材を用いることで集中力も高まり、理解できたと感じる児童は多いと言える。しかし、今回リストアップした教材のように、詳細な説明を省いていたために製作者の意図がうまく伝わらず、利用した担当者自身がわかりにくさを感じていたものもあった。教材を共有する際には、意図も含めた丁寧な説明をしていく必要性を感じた。

2 発表を終えて

全体的に好意的な意見が多く聞かれた。実際に提示したICT教材を、興味深い様子で見ている方が多かった。意見交換を通して通常級での使用の可能性と必要性を感じることができた。

小集団指導では、人とのかわり方に関するスキル（教材「はりきりチェンジ

くん」）を教えた後、そのスキルを使うような活動に取り組んできた。

アンケートの結果では、「理解度」などで低めの値が目立った。複数の児童を対象とする指導のため、理解の差にばらつきが見られたと考えられる。

今回の取り組みを振り返ってみると、ICT教材を用いることで集中力も高まり、理解できたと感じる児童

<ポスター発表の内容>

青年期は、身体的成熟や情緒的自立などの心身の諸機能の変化と、行動や心理の質的な転換が見られる時期であり、他者との関わり方も変化する。そのため、対人場面においても不安や緊張を感じやすい時期でもある。

中学生・高校生・大学生に対人不安・緊張尺度を実施した結果、その因子パターンが各グループにおいて異なるということが示されている(中村, 2012)。また、堀井(2002)の研究によって、対人不安意識は全般的に自意識の高まる高校生の年代に自覚されやすいことが示されている。以上のことより、発達段階によって対人不安は変化するということが推測される。

修士論文においては、対人不安・緊張を高める要因に着目することを予定している。対人不安・緊張を高める要因は様々であり、発達段階によってその要因は異なると考えられる。そのため、修士論文の目的を、①発達段階によって対人不安・緊張に影響を与える要因が異なるのかを検討すること、②性別の違いによってどのような特徴があるのかを明らかにすること、の2点とすることとした。これらのことを研究することによって、対人不安・緊張を緩和するための手立てを考えることにつながると考えている。

研究概要を以下に示す。調査対象は中学生・高校生・大学生を予定している。予備調査として、対人不安・緊張尺度を各発達段階に実施し、因子分析を行なうこととする。その結果を踏まえ、本調査として、対人不安・緊張尺度と対人不安・緊張に影響を与えると考えられる要因の尺度を実施し、関連を検討することとする。今回の研究において、対人不安・緊張に影響を与えられようと考えられる要因は、公的自己意識、自尊心、ソーシャルスキルに対する認知の3つとする。各発達段階において、この3つの要因のどれが強く影響を与えるかを、仮説を立てて検証していくこととする。

<当日の成果>

今回の発表において、ソーシャルスキルに関する質問を多く受けた。このことから、ソーシャルスキルの概念を明確化し、具体例を示しながら説明することに

よって、自分の研究が多くの人々にとって理解しやすいものになるということを考えることができたことが、発表を行なった成果であると考えられる。また、ソーシャルスキル以外の要因についても、再度検討を行なうことが良い研究につながると推測される。

自分の中でも不明瞭であったものが、今回の発表を通して、再度実感することができたため、自分の研究を見直す良いきっかけになったであろう。

<当日のポスター>

